



い「フラバル語」——には、なかなか受け容れがたいものがあるようだ。チェシュカ教授も言っていた。「とても残念だけど、今の学生はフラバルを読もうとしないんだよ。フラバル的な文体は、彼らにとってはもうむずかしすぎるんだ」。

小説における文体の簡潔化は、もちろんチェコだけで起きているのではなく、インターナショナルな、世界規模の現象である。文学が世界化するにつれ、文体の国民性が漂白されがちになる。

このことにもかかわるが、プラハで生活してチェコ人と交流しているうちに強く感じたのは、彼らのナショナル・アイデンティティの脆弱さ、自分達の国家に対する思いの複雑さである。むろん独断と偏見といって差し支えないが、僕が関わったチェコ人で、チェコという国にたいして手放して「誇り」のようなポジティブな感情を表明した人間は、ひとりもない（チェコ人をふくめたヨーロッパの留学生とともに受講した政治学の授業でもそうだった）。じつは彼らは母国を誇りとしているが、表に出さないだけかもしれない。そもそもチェコ、とくに現在のプラハはスラヴ系を中心とした移民に溢れており、19世紀の民族復興運動で芽生えた「国民意識」も、すでに薄れているのかもしれない。いずれにせよ、人生のほとんどを日本で過ごした僕にとっては（イタリアにも1年いたが、ナショナル・アイデンティティの強固さという意味では、日本とさほど変わらない）、この点はやはり非常に興味深く感じられた。

最後にもう少しだけ視角を変えて、この文章を終わりにしたい。

関係者にとってはお馴染みすぎて恐縮だが、チェコ共和国の国歌は、次のように始まる。

Kde domov můj, kde domov můj?

我が故郷はどこに、我が故郷はどこに？

僕をチェコ文学の深い森に誘った強烈な「わからなさ」は、ひとつには、この国歌と「君が代」の間にあった。これが今回の留学から得た、ささやかながらも大切な発見である。

（筆者はチェコ政府文部省国費留学生として、2014年8月から2015年7月までの11ヶ月間、カレル大学人文学部に留学した。その後1ヶ月ほど同大付属の語学学校 ÚJOP のサマー・スクールに通い、日本へ帰国した。）